

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4392400059		
法人名	医療法人社団 聖和会		
事業所名	グループホーム せいわながすの里		
所在地	熊本県玉名郡長洲町長洲2290-2		
自己評価作成日	令和3年10月10日	評価結果市町村受理日	令和4年1月14日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和3年12月1日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

重度化しても「その人らしい暮らし」を継続していただけるように、「パーソン・センタード・ケア」、「動き出しは当事者から」の考え方を実践できるように努力している。ご家族や大切な人との関係性を保ちながら最期まで安心して暮らしていただけるように生活支援を行っている。新型コロナウイルス感染症流行状況に合わせ、併設小規模多機能ホームと協力し、防災訓練や地域行事、オレンジカフェ等を地域の方と一緒に実施している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

入居者一人一人の思いを一番に、「動き出しは当事者から」の考え方は職員の中に定着しており、コロナ禍にあっても穏やかな中に活気のある時間を工夫し、メリハリのある日常生活が送られている。毎月の会議では、入居者の行動に繋がる声掛けについて言葉選びの重要性を学び、勝手な思い込みではなく、入居者の靴のサイズが本人に合っているかどうかを検証するなど、尊厳や暮らしやすさに焦点をあて支援している。コロナ禍以前は地域との関係性が深まり、入居者の日常に彩りをもたらしており、コロナ終息が節に待たれるところである。日頃から健康面をはじめ、電話や書面で連絡を行い、生き生きと業務にあたる職員の姿は、家族の安心や信頼に繋がっており、変わらぬホーム運営が期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見ると、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見ると、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念である自分たちの存在意義、運営姿勢、行動規範を共有したうえで、地域密着型サービスとして事業所の目標を立て、それに向かって実践し、毎月振り返りながら取り組んでいる。	この2年入居者の退去はなく、職員も法人への異動により1名の入職に留まるなど、馴染みの関係性を窓越しや書類からも垣間見ることが出来る。入職者には法人やホーム内研修で理念に触れ、ホームのこれまでの歩みや入居者への基本的なかかわり方について共通認識を持って臨むように導いている。	毎月の会議で課題を評価し、入居者の行動に繋がる声掛けについて検証するなど、言葉選びの重要性についても原点に立ち返るようにしている。今後も理念に寄り添ったケアの継続が期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染症流行状況により現在は難しいが、定期的な子供会との交流、地域の祭りの共同開催、防火訓練等へ地域住民の方も協力参加して頂いている	地域公民館でのオレンジカフェには現在職員が参加協力しているが、神社の夏祭りなどは中止となっている。外部からの体験や実習生の受け入れも見送られており、地域交流が難しい中で職員は室内活動の充実や入居者の出来る事で活動に参加してもらうよう工夫している。今回自然災害(洪水など)を想定した防災訓練には地域の協力が得られており、継続した取組が期待される場所である。	職員はコロナ禍で中止している地域との合同行事の再開に向け意欲的であり、終息後の展開が待たれる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	新型コロナウイルスで昨年度から外部との交流は減っているが、オレンジカフェ開催時は、地域の方がボランティアで会場やお茶の準備等して下さり、認知症の方との交流もある。年間計画には認知症について理解を深めるため講習や徘徊捜索模擬訓練を実施。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染症拡大予防のため会議開催ができないときは、資料により報告し状況を伝えている。	運営推進会議は直接開催を避け、書面審議にてホームの現状を発信している。ホーム長は会議録や資料を行政や地域代表者に直接手渡ししながら、意見や要望の収集に努めている。会議録には事故や身体拘束への取組について報告し、コロナ禍で外部との接触が制限される中、透明性のある運営を心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営や利用者等のことで適宜相談している。	行政には運営推進会議の記録や口頭でホームの現状を報告しており、相談事や質問に応じてもらいながら担当者との良好な関係が出来ている。認定調査時は状況を見ながら交流室や居室で対応し、入居者の現状を伝えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	認知症への理解を深め、利用者の言動の意味を考えることによって、身体拘束へつながらないように取り組んでいる。	職員は入居者の小さな傷や打撲痕などについてその都度原因を検証している。月の会議では入居者の心身の状況について更に職員の気づきを出し合い、対応や声掛けに不適切なものがなかったかなど検討し、拘束や虐待ゼロへの取組を徹底している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事故やヒヤリハットとしても、利用者様の表情や体の異変などの有無は、職員が普段から気をつけ、発見時は報告書で共有し原因を考察している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会に参加し伝達講習している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、改定時、解約時等は、事前に説明し同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関には意見箱を設置している。運営推進会議でもご家族に参加してもらい意見を頂いているが、日頃から利用者はもちろんだが、面会時やカンファ時など機会があるたびに職員はご家族と話すようにしている。	現在、家族との面会は交流室や窓越しで行い、入居者とのひと時を過ごしてもらうようにしている。家族からは感謝の言葉は聞かれるものの、意見や要望はなかなか寄せられていない。入居者の意向は普段の会話に盛り込みながら聞き取るようにしている。	家族の意見の引き出しにアンケートを実施されることも検討願いたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のリーダー会議で、事業所会議の職員意見内容を報告。また法人会議にも運営状況を管理者が報告している。	ホーム長は職員からあがった声を法人会議にあげ、業務改善やケア向上に反映させており、長年のチームワークで日々の支援にあたることとしている。希望休や有休(年間5日以上)へも対応している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課は、職員が半年ごとに自己評価、面談しリーダー表に添い目標設定し意欲的に取り組んでいる。業務は時間内に終わるように職員間で協力して働いている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新規入職者は、年度初めに法人新人研修に参加。人材育成研修も定期的に全体研修、リーダー研修へ参加。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長洲町介護事業所連絡会の研修は、今年度はオンラインで開催され、参加して事業所へ伝達している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に見学に来てもらい、ご本人の話を伺ったり、自宅訪問し生活環境や地域とのつながり等、それまでの暮らしを理解し入居後も本人の思いを大事にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談時にご家族の困りごとを伺い、入居前に再度確認。事前に自宅訪問し状況をみて、ホームでの支援を家族と共に考えるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の状態により、ご家族が病院受診の付き添いを困られている場合、希望があれば訪問診療可能な医療機関へ相談に同行している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	炊事、洗濯などご本人ができることは続けていただきながらスタッフと共同作業にしている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	感染予防のため面会制限あるが、ご家族に来訪時や電話等で日頃の生活状況を伝え、以前同様に誕生会は内容を相談して祝いの会を行っている。本人の喜ぶものをご家族もわかって持って来られる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染予防のため他者との接触制限あるが、普段の話題に写真、地元の広報誌等を提供し、近所や友人知人との思い出を語れる時間をとれている。	外出が出来ない中で職員は入居者の得意な家事への関わりや塗り絵などの手作業を支えている。ホーム内の馴染みの関係性に心を配っており、行政誌(長洲広報)を楽しみにされるなど、共通の話題でリビングが盛り上がるようである。女性入居者への化粧支援や漁業に従事されていた方が釣り番組を喜ばれるなどこれまでの生活歴を重視し、対応している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の状態変化や新規利用者があつたときも、利用者間の交流がうまくいくようにスタッフが介入したりリビング環境を見直している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院による退去後も面会やご家族の相談に応じている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	言葉で意思を伝えることが難しい方も、生活歴や本人の好みや家族からの情報などから、ご本人の望まれることを創造し考えるようにしている。	職員は日頃の会話の中から入居者の思いを収集している。言葉そのものが聞き取りにくい方であっても、声掛けに笑顔で応えたり、職員を見ると抱きつかれるなど全身で表現されることで言葉以外の中からも入居者の気持ちをくみ取るように努力している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前から自宅訪問、ご家族、担当介護支援専門員との連絡をとり生活歴や趣味嗜好などの情報収集を行い、入居後も本人の言動の意味するものをご家族へたずねたりしている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	当日出勤者で確認共有し、一人ひとりの変化に気づくように努め、課題があれば話し合うようにしている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	新型コロナウイルス感染症流行により、モニタリングは3か月ごとにおこない、ケアカンファは6か月ごとに実施。ご家族の予定に合わせて参加して頂き、本人もできるだけ参加してもらえようとしている。	入居者の意向を優先したプランを立案しており、ホーム生活の中にやりがいや喜びを感じてもらおうという理念に基づいた内容を掲げている。経年による認知症の進行や体調変化に寄り添い、その時出来る事で生き甲斐を感じてもらおうようにしている。計画作成担当者は入居者の現状や支援内容をわかりやすい表現で家族に伝えており、了承が得られている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日のバイタル測定、食事、排泄、睡眠状況、一日過ごされる中での本人の言葉や他者との関係性など個別にカルテに記録し、業務日誌にまとめて、申し送りが継続できるようにしている。疑問点等はその都度勤務者間でも話し合い伝達している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご家族の体調や新型コロナ流行状態によっては受診付き添い、買い物支援等もご家族と相談しながらおこなっている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の農家さんからの野菜配達は継続しており、春のじゃが掘りは、できる利用者は参加されている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からのかかりつけ医の継続を基本としているが、ご家族の希望によっては訪問診療可能な病院への相談を行っている。各人の体調に応じてバイタル測定や食事量など体調をかかりつけ医へ報告を随時行い医師看護師との連携をとっている。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援しており、現在3か所の医療機関による訪問診療が行われている。歯科は必要時に訪問による診療を支援している。認知症の進行から歯磨きが難しくなっていることも課題にあげている。現在、家族の面会を控えており、個々の健康状態を含めて小まめに連絡を行い、健康に関する相談にも応じてる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと兼務の看護師に、出勤時以外も24時間連絡体制で体調面の相談を必要時に行っている。またかかりつけ医の看護師とも患者家族について相談連絡をとっている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院初日より相談員や主治医に情報を伝え、入院中もカンファへの参加し、退院後ホーム生活へのアドバイス等をうかがうようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時より重度化した場合に関する看取りの指針、緊急時の延命に関する事前指示書を家族に説明し本人の意向をうかがい、それを主治医とも共有している。看取り期もホームでの暮らしの延長ととらえるとともにご家族の気持ちに寄り添えるように環境や関わりを心がけている。	入居時に重度化・終末期に関する指針、緊急時の延命に関する事前指定書への説明を行い、意向を確認し医師との共有が図られている。また、看取りの支援が必要になった場合、改めて家族の同意書を受けている。家族の思いに寄り添いながら、出来得る支援に努めており、横向きに寝返りされた時に目に入るような写真の掲示など環境作りにも配慮している。入浴ができない状態になれば、本人が気持ちよいと思ってもらえるような清拭で対応している。	ホームは看取り期も暮らしの延長として捉え、日常を大切に支援に努めており、殆どの家族がホームでの最終を望まれている。今後もその人らしい暮らしを継続して支援されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	体調観察のポイントや救急蘇生方法のイラストによる表示は行っている。また急変時の対応、連絡網についても掲示している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防火訓練は夜間想定し、避難誘導に地域の方も参加し実施。水害避難訓練は計画をたて今年度より実施。	年2回、防災訓練を実施している。今年度2回目の訓練では洪水を想定して地域の方の参加協力が得られている。昨年大雨が降った際は、ホームと法人本体の大型車両を使用し、本体施設へ避難し宿泊も体験している。ホームの居室は掃き出し窓であり、有事の際の避難にも有効と思われる。訓練については家族への報告が行われている。備蓄はホームでもリストを作成している。	今後も火災や自然災害をはじめ、防犯も含めた災害対策について訓練や対応策について検討されていくことが期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の方に声をかける時、居室訪問時のノックやトイレ時の声かけ、排泄介助時の羞恥心への配慮など気をつけている。気になるときはスタッフ間で注意したりミーティングの場で振り返りしている	職員は日頃の関わりから、本人の気持ちを察し、望まれる日常を支えている。不快になるような声掛けや誘導が無いよう、居室へ入る際は在室の有無に関わらず、その方の部屋としてノックを徹底している。身だしなみやおしゃれも個々の要望に応じる他、必要に応じたサポートに努めている。カットは2ヶ月に1回訪問により支援されている。	検温記録も含まれた面会簿については、個人情報観点から、個別管理など検討されることを期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉による表現が難しくても、これまでの生活習慣や認知症の症状を理解し、本人の気持ちを推測できるような関わりをもつようにしている。「動き出しは当事者から」の視点では、本人に「～できそうですか」と本人の意思を確認する声かけを意識している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本や雑誌を読んだり、カルタ等、それぞれの方が好まれるものを、手にとりやすいような場所にあらかじめ置き自ら動かれるような環境づくりをおこなっている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の好みの服やお気に入り、入居時にご家族へ依頼し持ち込んでもらっており、自分で取り出しやすいようなタンスの位置にしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	農家さんから無農薬野菜を週に2回配達してもらい季節の食材を味わうことができる。また食材の買い出し、材料の下ごしらえ、洗い物拭きなど。できる方は行ってもらっている。毎年の干し柿づくりは男性の方も参加される。	鮮度や無農薬野菜など食材にもこだわりながら、職員による手作り食が継続されている。誕生食には希望メニュー(ハンバーグ・オムライス・混ぜご飯など)を準備し祝っている。また、苦手な食材への対応や嚥下力に応じた食形態、雰囲気など食事を楽しめるよう心掛けている。職員は現在感染症への対応からそれぞれが弁当を持参しており、検査者1名が入居者の代弁者として感想などを生かすようにしている。	食事は入居者にとって楽しみの一つと思われ、手作り食の提供は調理の段階からも会話に繋がっている。継続した取組に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	状態や嚥下機能、認知症症状を評価し、固さや大きさ、ミキサー等食形態、提供回数や時間、スタッフ見守り方法など個別に対応し、毎日の摂取量記録、変動あれば主治医へ相談行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、本人に合わせた方法で口腔ケアを行ってもらえるように支援している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居時に1週間程かけて、尿意の有無、一回および一日の排泄量、排泄時間、排泄方法、汚染量などを評価し、本人の排尿パターンに合わせた支援と適切な介護用品の使用を提案している。	リハビリパンツを使用される方が殆どであるが、布パンツで過ごされる方には、下剤服用時はリハビリパンツにするなど配慮している。夏から秋にかけては汗の量が減り、排尿量も変わることから排泄用品や支援方法を見直している。このことは家族の負担軽減にも繋がっている。夜間を中心に使用される方のポータブルトイレは、その都度始末を行い、日中は日光干しにより清潔に管理している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況、摂取水分量、食事量、活動量などは毎日記録。毎食お茶はごぼう茶、食事バランスは考え調理している。体操は毎朝行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	自分からは入浴を好まれない方も週に3回は入られるような声かけや関わりをもつようになっている。脱衣所や浴室は、使用される方の空間として利用してもらえるように整理している	体調などにも配慮しながら週2～3回の入浴を支援している。拒否をされ方もおられるが、入られると心地よくゆっくり浸かられるようである。入浴後は保湿の他、乳飲料で水分補給が行われている。脱衣所や浴室の環境を整える事も、気持ちの良い入浴に繋がることを職員間で共有し取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼間はご本人が休みたいときに居室やソファ等で休息をとられている。就寝時はパジャマに着替えて気持ち良くやすまれている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬の変更時は、薬の内容と利用者の状態に影響予測されることも申し送りし、状態観察を行い記録している		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	花植え、塗り絵、週刊誌を読むなどそれぞれお好きなことや得意なことをできるように、手に取れる所に置いたり、準備や声かけをおこなっている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナウイルス感染症流行により外出の機会が減ったが、気候のよい日は、テラスで昼食や日光浴を楽しまれる。	これまでのような外出は控えざるを得ない状況であり、出来得る支援として敷地内の散歩や日光浴等外気に触れる機会に努めている。感染症の終息が見えない事から、引き続きテラスを活用したお茶や昼食、散歩などの継続に期待したい。また、外出気分を味わえるような雑誌の配置やテレビ、DNDの視聴など今後も職員のアイデアに期待したい。	車を使った外出の機会は減少しているようであるが、散歩やテラスの時間など外気に触れる機会に努めていることも家族に伝える事で、安心に繋がると思われる。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は、本人家族と相談し、自分で管理される方は、初詣のお賽銭をご自分で財布から出して参拝された。使われなくても所持していることで安心される方もいるためご家族も理解されている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話やオンラインによるビデオ通話も希望時にできるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	失認失行症状により場所や行為の理解が困難な方も、症状に合わせてトイレ内やリビング席の工夫をし他者とも一緒にくつろいで過ごすことができられるように配慮している。	入居者の心身の状態に応じ、席の配置を含めた環境整備に努めている。リビングでは趣味の塗り絵や気の合った方、又は一人でゆっくりソファで寛ぐ光景が見られ、釣りの番組が流れると自然に魚の話になるようである。開設時から手作りの料理が提供されており、台所からの音や匂いも入居者同士や職員との会話にも繋がっている。感染症への対応としてこれまで以上に換気や掃除の徹底、加湿、消毒などに努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士あるいはスタッフやご家族とで作業や談話できるような空間をもち、独りでもゆっくりできるようにソファやテーブル配置等に配慮している		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前に自宅訪問し、ご本人にとって使い慣れた物や大切な物を持ち込んでもらっている。また自宅の本人の部屋や生活空間を知ることを入居後家具の配置や家族写真など、本人、家族と相談し居室の環境を考えている	安心して過ごせる居室となるよう、家族の協力を得ながら自宅の環境を知る事から取り組んでいる。使い勝手の良い広さの居室には着慣れた衣類や必要な小物、家族や思い出の写真、収納ケースなどが持ち込まれている。入居後も24色の鉛筆や好みの色の衣類を準備されるなど、趣味の継続やおしゃれなど本人らしい時間を過ごして欲しいとする家族の思いが伝わってくる。現在、コロナ感染症の対応から職員が中心に衣類をはじめ居室を管理し、不足の品などがあれば連絡を行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ場所、手洗い洗剤やペーパータオル、ごみ箱等、また必要な方はタンスの引き出しなど、利用者の方にわかりやすい位置に表記している。		